

挑め!

壁の向こうへ

青森県産業技術センターの研究

⑩リンゴ品種開発

リンゴ生産量で日本一を誇る青森県。リンゴ王国とも称される青森の多様な品種開発を支えるのが、県産業技術センター「りんご研究所」(黒石市)だ。近年は落果防止剤が不要で生産者が作りやすい早生品種や、長期貯蔵に適した品種など、生産面や販売面の課題に対応した新品種開発に力を入れている。

品種開発は1928年に始まつた。品種登録まで至らなかつた物も含めると、これまでに46種類のリンゴ

選抜、登録まで20年超



生産者の園地で行われた品質評価試験（青森県産業技術センターりんご研究所提供）



2018年に品種登録された「紅はづみ」（青森県産業技術センター「りんご研究所」提供）

◆青森県産業技術センター「りんご研究所」1911年、旧黒石町（黒石市）の県農事試験場でリンゴの専門的な試験研究が始まった。31年にリンゴ専門の研究機関「県立農業試験場」として独立。50年に県農業試験場「りんご試験場」と名称を改め、68年に現在の庁舎が完成し、旧庁舎が史料館となつた。2009年の地方独立行政法人化で現在の名称になつた。

また、近年は無袋栽培で

開発を始めてから26年後の2018年に品種登録された「紅はづみ」は、9月上旬に収穫できる早生品種として期待がかかる。共に

開発を始めた20年以上的期間を要する。

最後の試験となる品種評価試験では、栽培特性の評価試験や生産者の園地を活用した現地試験、試験販売などをを行う。新たな品種ができるまでに20年以上の期間を要する。

開発を始めたから26年後の2018年に品種登録された「紅はづみ」は、9月上旬に収穫できる早生品種として期待がかかる。共に

開発を始めたから26年後の2018年に品種登録された「紅はづみ」は、9月上旬に収穫できる早生品種として期待がかかる。共に

生産、販売のニーズに対応

が誕生している。大玉で味が良い「世界一」、早生の主力品種「つがる」、台湾などで海外で需要が高い黄色品種「王林」など、個性あ

るリンゴを送り出してきが良い「世界一」、早生の主力品種「つがる」、台湾などで、同研究所品種開発部の

後藤部長（51）は、5千粒の種をまいて1品種できるかどうかの確率で「苦労は多い」と語る。実がある木ができるまで数年かかり、種の交配から約5年後に収穫は1年に1回。コメや他の作物と異なり、試験を

ささまざまの品種の交配で生

まれた800個体を对象

に、外観、食味、さびやつ

づつ袋を掛け、貯蔵性を

割れといった障害を確認

し、約10個体まで絞る。

交配から約11年後に始ま

る2次選抜は、個体を増殖

して既存の品種を活用

しきない。

高める有袋栽培が難しくな

っているためだ。長期貯蔵

力不足により、リンゴに一

つず袋を掛け、貯蔵性を

も乗り出している。

開発期間の短縮化も大き

くこのほか、リンゴの葉や

果実に黒い斑点が現れる病

害「黒星病」に強く味が良

い品種や、加工用に需要が

高まるカットリンゴに適

した変色しない品種の開発

を目指している。

このほか、リンゴの葉や

果実に黒い斑点が現れる病

害「黒星病」に強く味が良

い品種や、加工用に需要が

高まるカットリンゴに適

した変色しない品種の開発

を目指している。

開発期間の短縮化も大き

くこのほか、リンゴの葉や

果実に黒い斑点が現れる病

害「黒星病」に強く味が良